



附属図書館と理科系図書館

薬学部（図書委員）教授 矢 島 治 明

京都大学附属図書館に運営改善に関する委員会
があって、各学部、研究所からの商議員が、各小
委員会を分担して実質的な活動をしておられま
す。私も約1年半、おもに学生用図書選書委員を
して来ました。しかし実を申せば、私は此の附属
図書館を今まで一度も利用したことがありませ
ん。学生時代は戦時中のことで論外としても、教
育、研究生活に入って約15年間に一度も利用しな
かったことになります。試みに本学部の大学院生
の数人に質問してみました。教養時代に多少利用
した人がごく僅かで、大部分の人は私と同様の答
でした。教官の大部分もほぼこの様に思います。

この理由として、附属図書館が南部地区より遠
いという立地条件よりは、むしろ利用しようとし
ても附属図書館に理科系の研究図書が備っていな
かったことが最大の原因です。

これも当然のことで、本学では研究図書は部局
図書室で、学生用図書は附属図書館でという性格
のもとに運営されて来たからです。特に理科系で
は研究図書と学生図書との間にかなり明瞭な差が
あります。例えば南部地区では医学部が集中的な
医学図書館を持ち、薬学部も薬学関係の図書をほ
ぼ集中的に図書室におさめ、それぞれの研究分野
をカバーした機能を果して来ました。

しかし、この様な研究図書室の性格を備えた部

局の図書室も現在大きな問題に直面していること
を指摘せねばなりません。まず予算の問題があり
ます。すなわち部局の図書費は教官研究費で賄わ
れている関係上、図書費の高騰で、従来の購読維
持自体が困難になりつつある一方では、新しい研
究雑誌が続々と発刊され、これらの新規購入は不
可能に近い状態におかれて来ています。すなわち
急速な学問の発展にともなう爆発的な情報量の拡
大に図書費が伴えない状態が来ています。

一方企業の研究所では文献のマイクロ化、JIC
ST (The Japan Information Center of Science
and Technology) や JAICI (Japan Association
for International Chemical Information) 等を
通じて情報整備の体制を整えています。もし大学
の部局図書室が現状のまま推移すれば、やがて従
来の研究図書室の機能低下はまぬがれません。従
って我々研究者は、部局図書室の運営に対する考
えを変えねばならない時に来ている様に判断され
ます。

自分のことで恐縮ですが、私は目にふれる一次
情報以外に CA (Chemical Abstract) の関係項
目、IRL (Information Retrieval Limited) の二
次情報に目を通して文献の見落としのない様にして
います。前者はアメリカ化学会の編集ですが、後
者はイギリスの Oxford 大学の編集で、此の国

が、大学に巨大な情報センターを持ち、CA 以上の細い項目別に此の様なサービスを全世界に行っていることに大きな驚きを感じます。

では我が国の国立大学の附属図書館はどうかという問題ですが、国立大学図書館協議会等を通じて、此の情報時代の波の中に新しい図書館のシステム化が進行している様子です。本学附属図書館でも、部局図書室との間に、従来の目録サービス以外に新しい交流が生れて来ました。まず昭和51年度以来、附属図書館の予算で購入した学生用図書（大学院学生を対象とした研究的な性格をもったものも含まれる。）の一部が部局の図書室に備えられる様になり、また共同利用度の高いものは附属図書館に置かれ、したがって附属図書館が研究にも使用される図書を置く様になりました。また特に理科系学部の関係として、このたび附属図書館の予算で購入された理科系外国雑誌が部局図書室に備えられることになりました。また第二次資料として各学部の共通利用度の高い高額参考図書として Beilsteins, Handbuch der Organischen Chemie ; Gmelins, Handbuch der Anorganischen Chemie ; Science Citation Index ; ロシアの化学系英訳誌, Sadtler の赤外, NMR chart（後者は附属図書館より薬学部への割当分をあてたもの）が置かれる様になりました。その場所に行かねば見られないとなると多少の地域的な不便をしのんでも出かけざるを得ず、当学部よりも附属図書館の利用者が出はじめました。以上の様に理科系学部より見れば無縁であった附属図書館とも、利用者側の交流が始まったのですが、此所に置かれる資料の内容や将来像は未だ固定化されたものではない様です。恐らく試行錯誤があると思われませんが、私個人としては、附属図書館に理科系の二次巨大情報館の性格を含んでいただきたいと希望しています。そして将来には情報検索も可能なオンラインシステムを持った京都大学全学の

上に立つ附属図書館像を期待しています。

私達は論文を書く場合、引用文献を脚注に記入していますが、従来の方式で進みますと、将来これが不完全で学会誌に受理されなくなり、しかも全部記入しようとすれば紙面の大部分を消費せねばならなくなるでしょう。この様な場合には、例えば対応する JAICI の番号を記入する様になるかもしれません。この様な事態に対応出来る様な体制が必要ではないでしょうか。

以上は研究者の立場にかたよった意見ですが、学生用図書への期待を附記します。現在附属図書館で購入している学生用図書のうち理科系図書（自然科学、理学・工学関係）の比率は約16%前後です。これはかなり低い比率かもしれませんが、我が国の月間の出版物（新刊図書目録より）のうち、理科系図書は18~25%で、このうち大学にふさわしくないものを除きますと、ほぼ出版数に比例したものを附属図書館は購入していることになります。理科系の本は、新しい学問の発展によって不朽の名著といわれるものは非常に少く、時とともに利用価値がうすれる傾向の本が多いのが特色です。したがって購入後、これらがたとえ短い命であっても、如何に活用されるかが非常に大切な要素となります。調べてもらいますと、昭和50年度、開架図書で5万冊読まれたうち、理科系の図書の利用率は幸にして36%と、他の部門に比して非常に高い値であることがわかりました。16%の購入に対して36%の利用率があることになります。しかし学部別にみますと薬学部学生の利用率は1.6%（参考までに医学部学生の利用率は0.6%）と非常に低利用率ということでした。学部によって学生数が異なりますので直ちに結論出来ませんが、地域的な要素がある様子です。したがって学生図書も定期的に検討して、部局図書室との相互移管が行われてもよいのではないかと思います。